

Ruhe (ルーエ やすらぎ)

März 2015

33

The German House in Naruto

発行日 2015年3月25日
発行 鳴門市ドイツ館
編集 川上三郎
〒779-0225
鳴門市大麻町桧字東山田55-2
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL: <http://www.city.naruto.lg.jp/germanhouse/>
e-mail: doitukan@city.naruto.lg.jp

指定管理者交代

ドイツ館は2006(平成18)年4月から指定管理者制度となり、その年からドム有限会社(代表藤田徹)が指定管理者となっております。従来3年間の契約となっております。同社がその後さらに二度指定を受けてきましたので、つごう9年間指定管理者になっておりました。来年度からの指定管理者選定に当って公募、選出作業ののち、当初は同社が指定管理者として市議会に提案されたのですが、残念ながら承認されませんでした。不承認の理由として、入場者数の減少が挙げられています。要するに営業努力が足りないということでしょうか。ただ徳島県全体でみて、どの観光施設も来場者の減少に悩んでいることは確かですので、他の事情もあったのかもしれませんが。

ドム有限会社はこれまで館内でのさまざまなイベントや独自企画を開催してきました。中には恒例行事になっているものもありました。その努力はおおいに評価したいと思っております。代表の藤田氏自身が言うように、それらへの来場者が必ずしもドイツ館常設展への入場者には直結しなかった憾みがあります。ただ、常設展がもっと展示替えをしたり、より魅力あるものにすれば、入場者はもっと増えたかとも思いますので、館長として忸怩たる思いはあります。



イベントのひとつ(ビール祭り)のようす

さて、来年度からの指定管理者には、応募団体の中から新たに一般社団法人鳴門市うずしお観光協会が選定されました。今回からは5年間の契約となるとのこと。これからどのような管理運営がなされていくのか、そしてどのようなイベントや企画が立ち上げられるのか。またミュージアムショップもどのようなものになるか、楽しみにしたいと思います。

徳島俘虜収容所

1917年4月、板東俘虜収容所に捕虜がやって来る以前、彼らは徳島、丸亀、松山にいました。このうち徳島はその収容所長が板東と同じ松江豊寿でした。今では鳴門市の板東俘虜収容所がすっかり有名になり、徳島市内にも収容所があったことをご存じない方が徳島市民にすら多いのですが、現在の徳島県庁駐車場の付近にありました。当時そこに徳島県会議事堂(あるいは徳島市公会堂とも言われた)があり、それにバラックを増築して捕虜を収容していたのです。



捕虜収容所のとときの徳島県会議事堂正面

この徳島県会議事堂はその模型が大正年間、徳島工業学校の生徒によって製作されていました。それを寄贈いただいた経緯や模型に関する記述は当館報第22号に掲載しています。

<http://www.dt-haus.org/ruhe/japanese/num22.pdf>

残念ながら当館では展示する機会がなかなかなかったところに、「阿波大正浪漫 バルトの庭」より借用して展示したいとの申出があり、現在そちらで展示されています。

さて、この県会議事堂はその場所に昭和の初期、徳島県庁舎が建設されたので、てっきり取り壊されたものと思込んでいました。実際はそうではありませんでした。

先頃、徳島県剣道連盟の三木毅副会長が来館されて、この建物にまつわる話を聞かせていただきました。三木さんの本来の目的は、第二次世界大戦前に徳島公園内にあった「武徳殿」の写真を探し求めることであつたのですが、この武徳殿は実はこ

の県会議事堂が移築されたものだということです。徳島公園時代の武徳殿の写真は空襲で焼失したり、戦後武徳会の資料が廃棄あるいは散逸したせいか、一枚も無いとのこと。文書館や既刊の歴史的な写真資料集などでも発見できなかったそうで、最終的に県会議事堂が捕虜収容所としても使用されていた経緯から、ドイツ館にひょっとしてあるのでは無いかと訪ねてこられたのでした。

徳島収容所については幸い、そこに収容されていた2人の方が所持していた写真アルバムをドイツ館に寄贈していただいております。県会議事堂の鮮明な写真が何枚もあり、そのうちの1枚を提供しました。板東収容所関係では各種写真資料の借用依頼が年に何度か来るのですが、徳島収容所については本当にまれです。いずれにしろお役に立つ機会があるのは、資料館としての役割をもつ当館にとって嬉しいことです。

さて、ここでは捕虜が来て早々に楽団が結成されました。その楽団は、捕虜の総勢206人という小さな収容所なのに最終的に28人ものメンバーがいて、活発に活動し、分っているだけで50回の演奏会をしています。この楽団については徳島市内に住み、収容所に隣接する中学校に通っていた人のこんな証言があります。

またこれは明らかに中学に進んでからだが、なにぶんお隣だから毎日必ず収容所の前は通る。ある日ここで音楽会があった。驚いたことにわれら中学生（おそらく市民もであろう）も入場自由なのだ。番兵はいたが止めなかった。武徳殿側の二階席から聴いたが、オーケストラなるものを知ったのはこれが全くのはじめて。曲目ははっきり憶えている。イヴァノヴィッチの「ドナウの漣」が一つ。（途中略）明らかに最初から市民向け公開を考えての音楽会だったとしか思えぬ。

（中野好夫『主人公のいない自伝－ある城下市での回想』より）



県会議事堂を背景に徳島オーケストラの面々

これは1916（大正5）年のこと。中野好夫の聴いたオーケストラが「徳島オーケストラ」であり、これが後に板東でベートーヴェンの「第九」を演奏することになるのです。その楽団の徳島時代の記念写真がありますが、全員ちゃんとした楽器を手にはしています。他の収容所では制約が多くて楽器の購入がま

まならず、自作したなどという話がありますが、それは徳島に関して無縁のことでした。何しろ、ここには収容所長の松江豊寿のほか、その片腕として活躍した高木繁もいました。高木はこの記念写真の中央にしっかり写っています。

後年、徳島市民が板東のもう一つのオーケストラの指揮者であったパウル・エンゲルに頼んで西洋音楽の演奏を教えてもらうこととなります。その音楽への意欲の素地は、この時徳島オーケストラが屋外で演奏会をすることが多かったため、その演奏を市民がたえず耳にしていたことにあるのだと私は思っています。

「なると第九」

鳴門市は今“アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト”という企画を進めています。

<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/>

1982（昭和57）年5月に鳴門市文化会館のこけら落しコンサートとして「第九」が演奏されて以来、鳴門市では毎年「第九」演奏会が開かれ、今では全国各地、それどころかアメリカのロサンゼルスからも合唱を歌うために来る方もいるという鳴門の一大行事になっています。

上の記事でも触れていますが、鳴門市はベートーヴェンの交響曲第九番が日本で最初に演奏された地なのです。ドイツ館は鳴門市の西端にあるのですが、昔その近くに板東俘虜収容所が



ベートーヴェン交響曲第九番初演の時のプログラムがありました。そこに収容されていたドイツ兵が「第九」全曲を演奏しました。1918（大正7）年6月1日のことです。東京音楽学校での日本人演奏者による「第九」初演は1924（大正13）年11月のことですから、それに先駆けること6年前の話です。鳴門市では、当時の音楽事情に鑑み、またドイツの専門家に確認してもらい、日本初演にとどまらずアジア初演であると謳っています。

3年後の2018年には初演から百周年を迎えますので、市ではその時に特別のイベントを開催する計画があるようです。これを単発の大きなイベントに終らせないためにも、「第九」を鳴門市の観光面のみならず、住民、地域、学校、行政に根を下ろしたものにしたいとの思いがあるようです。

第一次世界大戦展

昨年は第一次世界大戦勃発から100年目に当たる年でした。ヨーロッパでは、戦勝国にも敗戦国にも未曾有の犠牲者と損害をもたらしたこの大戦に対する関心は高く、特別展やシンポジウムが開催されたりしたようです。日本ではほとんど関心を引くことはありませんでしたが、関連学会の開催や論文集の発行などがありました。ドイツ館でも関連企画として「第一次世界大戦と四国の捕虜収容所展」という特別展示を昨年10月30日(金)から11月27日(木)まで開催しました。

他所から資料を借りず、ドイツ館所蔵資料のみを利用する展示というせいで、かなり簡素なものではあったのですが、この悲惨な大戦と青島での日独戦争を一端でも紹介できるように心がけました。また四国の捕虜収容所については、板東以前の四国の収容所について知ることは板東収容所を知る上でも重要なことですので、今回の機会に紹介することにしました。

特別展「ドイツと日本を結ぶもの — 日独修好150年の歴史 —」(予告)

まだ先のことなのですが、本年の12月9日から来年の1月24日まで、当館の1階ホールと2階特別展示室を会場に標題の特別展が開催される予定になっています。これは国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)が企画・立案する中核館となり、そこに横浜開港資料館、長崎歴史文化博物館のほか鳴門市(ドイツ館)が加わる形で開催される大々的な展示です。

これら博物館の規模と施設、展示方針などの関係で、4館通じて同一のものが展示されるわけではありません。またそれぞれの地域性にもとづく巡回館独自の展示も予定されています。ドイツ館について言えば、展示ケースは2階でしか使えず台数も限られていますので、残念ながらきわめて限定的な実物(あるいはレプリカ)の展示しかできません。それでも地方ではふだん見る機会がないものをお見せする計画です。一方鳴門独自のもの、鳴門市とリュネブルク市との姉妹都市交流をはじめとする日独交流の歴史についても概観したいと考えています。

日独交流の歴史を、その始りから通史的にふり返り、展示することは鳴門市ドイツ館ではなかったことです。せっかくドイツとの強い絆を持つ鳴門であり、「ドイツ」という名前を持つ当館ですので、この機会に日独交流150年史をふり返る展示は非常に意義あることと考えます。

所蔵品紹介

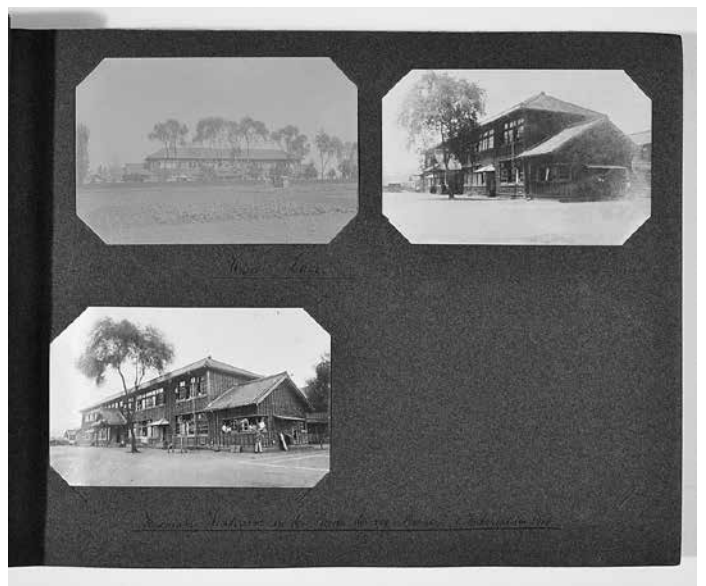
クロップ旧蔵写真アルバム

2003(平成15)年6月にドイツのブラウンシュヴァイク市で「第2回ベートーヴェン『第九』里帰り公演」が開催されました。これはその2年前にリュネブルク市で開催された同様の「里帰り公演」の成功を受け、ブラウンシュヴァイク行政区からの招聘で実現したものでした。その詳細は当館報第7号に書かれています。

<http://www.dt-haus.org/ruhe/japanese/num07.pdf>

そこに書かれているのですが、それは公演の成功と言うだけでなく、もうひとつ大きな成果がありました。それはその際に、ドイツ兵捕虜の関係者から当時の収容所に関する多数の貴重な資料を寄贈いただいたことです。それらはそれまでドイツ館が所蔵していなかったものがほとんどで、展示に役立たせていただくだけでなく、研究面でも多大の寄与をなすものです。またこれらの資料は板東俘虜収容所だけでなく、他の収容所関係のものもありました。今回紹介するものはそのひとつで、大分から後に習志野収容所にいたJoh.D.クロップ旧蔵のアルバムとアルバム以外の写真です。それを彼の2人の娘さんから寄贈していただきました。

アルバムの写真もそれ以外の写真も大分収容所関係のもが大変多く、習志野収容所のものは18枚含まれているだけです。その大分収容所が当初設置された12個所の捕虜収容所のなかで一風変わっているのは、小学校の校舎が収容所となっていたことです。



アルバム第1ページ

大分収容所での写真のうち一枚を『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第10号の表紙絵に使いました。これは日本人観衆の

前でドイツ兵捕虜たちが体操の集団演技を披露しているところなのですが、これについて新しい事実が最近判明しました。先日、ドイツ館史料研究会会長の井戸慶治徳島大学教授が捕虜収容所調査研究の一環として大分市に調査に出かけた折に、収容所のあった小学校（大分市立金池小学校）の校長先生と面会して話を伺ったそうです。小学校にも収容所についての記録があり、第四校舎が収容所に当てられていたそうです。そして1915（大正4）年10月18日の運動会に捕虜たちが「余興」として参加したとのことでした。そこで改めて写真を調べたところ、日本人観衆がいるのは上述の写真のほかダンベル挙げをしているものがありました。しかし、どうやら日にちは違うようです。後者の写真の裏面には「1915年、即位の礼にあたり行われた捕虜収容所に隣接する小学校の祝祭」と書かれていました。大正天皇の即位の礼は11月10日のことですので、捕虜の体操演技の披露はこの年に2度あったこととなります。「余興」という名目にしろ、捕虜を運動会に参加させて演技を披露させたのは、それだけ捕虜たちの体操活動が周囲の注目を浴びるほどすばらしく、感心させていたからに違いないでしょう。

アルバムの写真を見ると、地元との交流とふれあいは何も板東に限ったことではなく、大分でもあったことがうかがえます。



日本人観衆の前でダンベル挙げ

『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』

鳴門市ドイツ館にはこの研究誌の刊行会の事務局が置かれています。編集はドイツ館史料研究会会長である井戸慶治徳島大学教授ですが、このところ公務に多忙で第12号の発刊が遅れていましたが、3月末には出版する予定です。

この研究誌では論文に限らず、翻訳、エッセー、報告など各種の原稿を募集しています。原稿をいただいた方には協力費もいただくこととなりますが、この分野に関係する、あるいは関心のある方にぜひご投稿をいただきたいと存じます。簡単な案内が以下のURL にあります。

<http://www.dt-haus.org/journal/>



これまでの主な行事

- 10月30日～12月21日 第一次世界大戦と四国の捕虜収容所展
- 11月9日 中国・四国エスベラント大会
- 11月16日 笑っちゃう会
- 11月22日～12月5日 A S A 絵画コンクール展
- 12月13日～14日 第5回クリスマスマーケット
- 1月1日～18日 前田博史写真展
- 1月1日～15日 川口えつこ展
- 1月27日～2月28日 極限の時代における独裁と民主主義展
- 2月22日 第8回フリーデンスフェスト
- 3月1日～15日 グリム展
- 3月15日 よんでんアンサンブルコンサート
- 3月17日～31日 田井一男展
- 3月21日 鳴門関税会文化イベント
(オペラコンサート)

コンサート予告

- 4月5日（日） 「ラヌクルス」日本初ツアー
めずらしいドイツ中世音楽を一緒に楽しみましょう



ドイツ館を背景に早咲の桜（蜂須賀桜） / 3月12日撮影

編集後記

収蔵品について記事を書く度に、ドイツ館がどれほど各方面からの寄贈の恩恵を受けているかを実感します。そしてそれらは当時を知る貴重な資料として館内の展示のみならず、収容所研究にも役立ち、写真など各方面からのご要望に応えるために使われています。

前回の編集後記で、映画『敵が友となるとき』のDVDをミュージアムショップで販売すると書いたのですが、指定管理者が交代するのに伴い、ショップではなくドイツ館の事務窓口で販売することになりました。

(E-mail: info@dt-haus.org)

(川上)